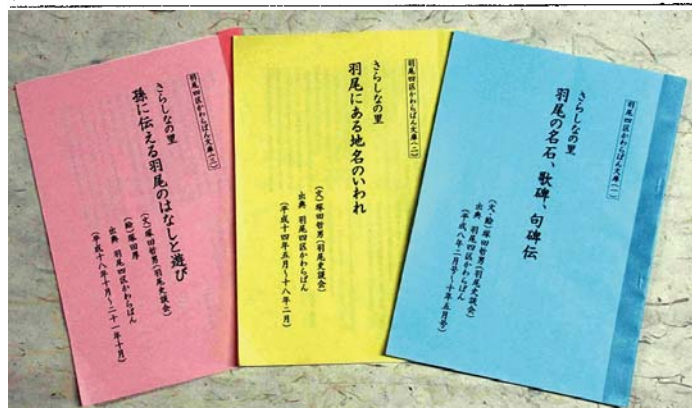




坊城平主会場にプログラム準備
残念ながら大雨で中止に

さらしなの里のシンボル、冠着山の坊城平で、子どもたちに「生きる力」を身につけてもらおうというイベントが8月27・28日に開かれる予定でしたが、残念ながら大雨のため中止となりました。

イベント名は「さらしなの里・オバステグリーンキッズフェス」。企画の中心を担ったのは、さらしなの里への移住者を呼び込むなど、地域づくりを進める会社「な

りわい」。冠着山の自然や歴史文化を活用したプログラムをさまざまに分野の講師の力を借りたり、多くの人から資金の支援を得たりして当日に臨みましたが、雨が続き、事故も想定せざるをえなくなり、苦渋の決断となりました。左の写真は、イベントに向けみんなで会場を設営したり、準備の合間に遊んだり、信仰の場としての冠着山を体験したときの様子です。



今思ふこと

若宮区 柳澤けさ子

自分の健康のためにとやり始めたのが、「スポーツ吹矢」。あまり動かずにできるスポーツとやり始めたのだが、なかなかこれが奥深い。千曲市で支部を設立し、現在50名以上になっている。男性が多いのも特徴で、平均年齢が、68歳と高齢だ。

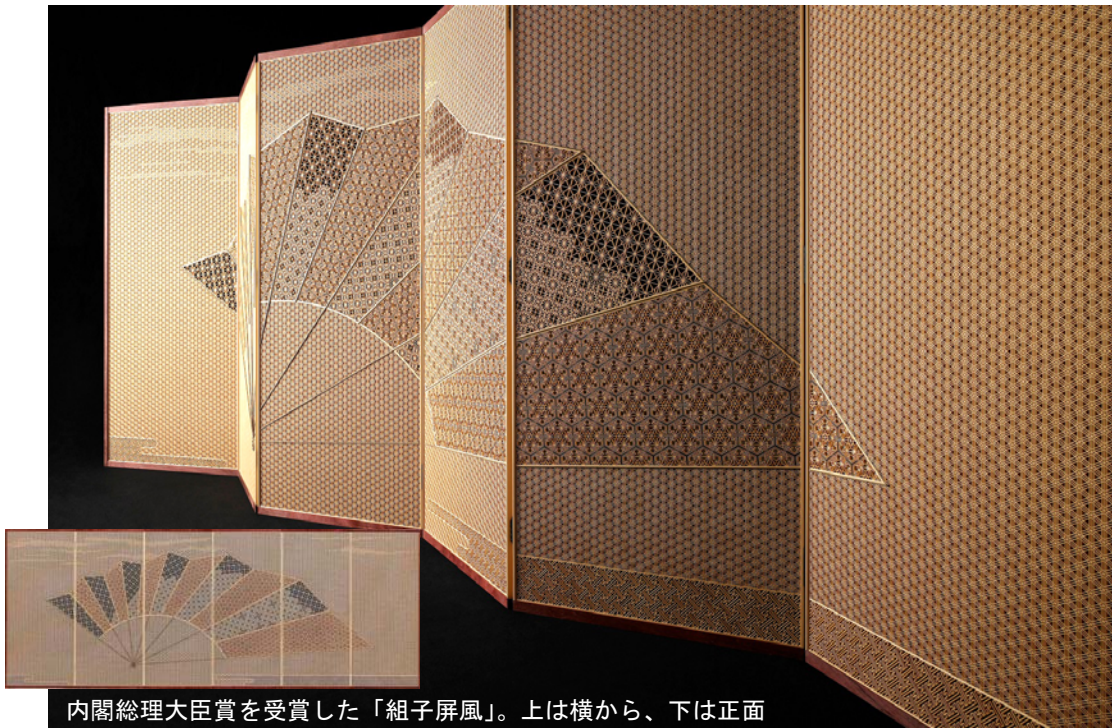
先日「全国障がい者スポーツ吹矢大会」が東京都港区スポーツセンターで、170人の参加者で開催されました。わが支部からも、脳性麻痺の50代の男性が参加し、私も同行しました。電動車椅子なので、車椅子の部門で競技することになりました。

120^キの筒で矢を腹式呼吸で、的に向かい吹く。100^キを超すスピードが出る。ゲーム制もあり、健康にも良く、誰にもできるニュースポーツだと聖路加国際病院の日野原重明先生も、最高顧問として薦めています。



彼は両手が不自由なので、あみだした方法が、足で口元まで筒を持ち上げて吹く。想像してみてください。いかに大変なところか。彼の汗だくになって吹いている姿には、皆勇氣と元氣をもらってます。大会でも、このように足で持つて吹く人は、全国にはおらず、入賞はできませんでしたが、努力賞をいただいています。

今年はちょうど「リオパリンピック」が開催され、いろいろな種目に出場されてる競技者に、感動しました。どれだけの涙と汗を流してきたのだろう。一過性のもので終わらないよう、誰でもが暮らしやすい世の中になつてほしいものです。



内閣総理大臣賞を受賞した「組子屏風」。上は横から、下は正面

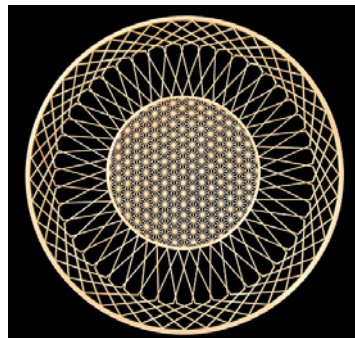
木材を小さく細く加工していくつも組み合わせ、木肌の色の違いなどで一つのデザインや小宇宙を作る組子。その職人技の日本一である内閣総理大臣賞などさまざまな賞を受賞してきた芝原区の中村光敬さんに、組子の魅力を文章で寄せてもらいました。中村さんは戸倉町時代の豊城麟太郎町長（故人）から、「さらしな組子」というブランド化をアドバイスされていたそうです。商品の清らかさはまさに「さらしな」です。

（編集部）

「さらしな組子」で世界の模様にも挑戦



「麻の葉」をデザインした組子



幾何学模様の「壁飾り組子」

「杭つぽにしかならないうよ」と言われていましたが、組子や家具に加工して時を過ぎればきれいな飴

組子に使う材は木曽桧を多く使いますが、杉（秋田杉、日光杉）も多く使います。また木の色の違いを使ってデザインするために紺色や茶褐色の神代杉（土の中に埋もれていて変色した木）も使います。堅いケヤキもお寺や仏壇などの組子に使われます。カラマツは

一、木の魅力

組子とは欄間や書院障子、障子、襖などに使用され、細い木を加工してさまざまな模様を組み上げたものです。お寺、お宮、住宅の欄間でご覧になっていると思います。そんな組子にはさまざまな魅力があります。

二、デザインの魅力

組子のデザインには「麻の葉」など日本古来の模様が多く使われます。麻は丈夫に真直ぐに育つことから子供の産着の柄に使われます。組子の模様にも縁起が良いことから多く使われます。親の子に対する願い、家主の家族に対する願いでしょう。

近年、弊社ではオリジナルな新しいデザインに挑戦しています。「木のデザイン展」で入選し、長野県知事室に納めた幾何学模様の組子などがあります。日本の模様だけでなく世界の模様や、新しいデザインに挑戦しています。

三、装飾としての魅力

最近では寺や神社だけでなく、ホテルの壁、天井にも使っています。北陸新幹線の佐久平駅の壁にもあります。地元ではさらしなの里展望館でも使っていますので、機会があったらご覧ください。

小さな壁飾りの組子でも玄関や部屋の表情が変わります。お納めして喜んでいただけると職人として最高の喜びを感じます。

（芝原区・中村光敬）

縄文人はなぜヒスイを身に着けたのか？

再生の色、永遠の形

現代でも宝石として珍重されているヒスイ。半透明な深緑色はとても魅力的です。今から6千年ほど前の縄文時代前期から注目され、たくみな技術で加工され、装身具になってきました。

ヒスイは漢字で「翡翠」と書き、カワセミとも読みます。カワセミは、背中はルリ色系の緑色で、おなかはおれんじがかった朱色をしています。ヒスイは、カワセミと

同じような色を持っていたので、朱色は「翡（ひ）」、緑には「翠（すい）」の字があてられ「翡翠（ひすい）」という漢字ができたのではないかと考えられます。

さて、羽尾四区にある縄文時代の円光房遺跡からは、ヒスイの原石の破片、ヒスイの表面に磨きかけたものの、そしてビーズ状に整えられた製品2点の計4点が出土しています。



円光房遺跡から出土したヒスイの原石



ビーズ状に加工されたヒスイ（円光房遺跡出土）

ヒスイの製品は、すべての縄文遺跡から出土するというものではなく、拠点的な集落遺跡や工房跡など限られた遺跡からしか出土しません。

ヒスイの翠（みどり）色は、若葉の色、再生の色にもたとえられます。一方、ヒスイはダイヤモンド、ルビー、サファイアに次ぐ硬度があり、加工に大変な労力と技術を必要とし、加工したものは永遠不変の形を保持します。こうしたことから、縄文人がヒスイに特別な想いを寄せ、特別な価値を与えていたことがうかがえます。

ヒスイには複数の産地がありますが、遺跡から出土するほとんどのヒスイは、新潟県糸魚川市の姫川流域産と推定されています。糸魚川から遠く、数百キロも離れた遺跡からも出土しています。なお、日本鉱物科学会は9月24日、最も日本らしい「日本の石」として、ヒスイを選定しました。

最後に私事ですが、筆者翠川の姓にも翠の字が使われています。翠川家の先祖は、溪谷を流れる翠色の清流の近くに住んでいたのではないかと考えられます。（さらしな里歴史資料館学芸員・翠川泰弘）

冠着山関連の過去記事が
ネットで読めます！



さらしな里友の会だよりに掲載された冠着山関連の記事がインターネットでも読めます。さらしな堂のホームページ「みんなの冠着」コーナーです。友の会だよりがアップされています。

編集後記

羽尾四区かわら版、400号を超えているというのすごいです。年2回発行の本誌がその域に達するまであと200年。かわら版は全号、明徳寺に保管されており、閲覧もできるそうです。中村光敬さんの組子の制作工房も見せてもらいました。考案したデザインと色を形にするために幾種類もの大きな材木を、小さく細やかな部品に加工します。膨大なパーツの辺をすきまなく組み合わせる作業は、まさしく「精度のかたまり」（中村さん）です。

編集・発行

さらしな里友の会たより編集委員会

（事務局・さらしな里歴史資料館）

〒389-0812

長野県千曲市羽尾247の1

電話 026(276) 7511

fax 026(261) 4161